〔書　評〕

山口堯二著『構文史論考』

信太知子

一

本書は、先に『古代接続法の研究』（昭和55）、『日本語疑問表現通史』（平成2）、『日本語接続法史論』（平成8）を世に出された、山口堯二氏の四番目の著書で、「はしがき」に記されるように、平成二年から十年に至る九年間に発表された論文の中から、「助詞と構文に関するもの、またはそれに関連するもの」十編を収録した論文集である。その題目は次の通りである。

第一章　古代語の「の」「が」の関係表示
第二章　古代語の修飾法
第三章　中古語の「て」連用句とその周辺
第四章　古代語の準体句構造
第五章　準体法の推移と準体助詞「の」の形成
第六章　疑問助詞「やらん」の成立
第七章　非疑問形反語形式の史的考察
第八章　係り結び体制末期の新旧連立形式
　——機能の新旧連立性——
第九章　対比的な複文の前句における「あり」の朧化用法
第十章　副助詞「しか」の源流
　——その他を否定する表現法の広がり——

右に示したように、接続表現、疑問表現研究の過程で派生したと思われる問題も多く、著者独自の論文スタイルということもあり、本書を読むについては、先の三冊の著書を手許に置いて読み進める必要がありそうである。以下、本書の順序とは別に、評者の関心との関わりでいくつかの章にまとめながらみてゆく。

二

まず、連体句あるいは準体句が関わる章として、一、二、四、五章をとりあげる（ちなみに、原論文は二、四、一、五章の順で発表されており、著者の中でどのように準体法の問題が深化していったかが

窺え興味深い)。

第一章は、格助詞「の」と「が」の違いを、準体句を承けるか否かという点から考察し、「が」は用言性の語句に準体化を要求するほど上接語制約力が強く、逆に上接語制約力の弱さゆえ「の」は「連体形+こと」や「ク語法」のような〈体言的な対象性の安定した句〉を含む種々の語句を承接すると説明する。そして、「の」「が」はともに〈古代語の係り結び的構文体制〉の許容範囲で喚体性の句、準体句、従属句の主語表示に関与しているが、関係表示の分析度の強い「が」は述体性の句の主述関係、弱い「の」は喚体性の句の連体関係という方向に分化すると指摘する。また、関係表示の特徴として「が」は統率的・明示的、「の」は連結的・文脈依存的という両者の差違が提示され、さらにここから二次的に生じたものが待遇表現上の差違であるというように、古代語から近代語までを視野に入れ、両助詞の同質性・異質性を全体的に記述することに成功している。

第二章は、古代語の連体法、連用法という修飾法について述べたものであるが、修飾句の構造を、〈統括語〉(内部的に句を統括する用言文節)と〈代表語〉(対外的にその句の意味を代表する部分)という術語で規定する。連体法、連用法を同じ構造として捉えようとするため、連体法では連体形による用言文節を代表語、準体法では用言文節ではなく含意としての〈被語〉(被修飾語)を代表語とするという不均衡が生じる。周知のごとく、連用句はそのままの形で主文の成分となりうるが、連体句は一般には被修飾語を伴ってはじめて主文の成分となるという構文上の違いがあり、同列に扱うことには無理があろう。この点を踏まえ連体句についても被修飾語までを含めた形を考えれば、連体法と準体法とで代表語が異なるというわかりにくさは解消できよう。ただ、古代語の連用法、連体法ともに〈被修飾語との意味関係に拘束されず句的叙述性を保つことができるという論理的おおらかさがあった〉という指摘などは、注目すべきものである。

第四章では古代語の準体句の構造を代表語のありようから次の三類に分類する。

一　被語相当の含意を代表語とするもの
　防人に行くは誰が背と問ふ人を　(万葉)

二　句中の体言を代表語とするもの
　犬を流させ給ひけるが帰り参りたるとて　(枕)

三　卓越化した句の対象的意味を代表語とするもの
　都のちかづくをよろこびつつ　(土佐)

これらは、準体句を大きく二類に分類する近藤泰弘氏の用語[注1]に従えば、一は同一名詞準体の消去型、二は同一名詞準体の追加型および残存型、三は同格準体で、一と二は同一タイプとなる。近藤氏の分類は現代語の名詞節(連体修飾節)の分類に基いたもの、著者のそれは古代語の観察に基づくものである。著者自身も第二類について〈含意として捉える体言のほうを代表語とみれば……第一タイプと似てくる〉と述べつつも、実際に含意としての体言が顕在する例が存在しないことを理由に三分類説を採る。第一類と

第三類の代表語が質的差はあっても含意として捉えられるのに、第二類だけ代表語が句中に現れ、〈意味の理解には行きつ戻りつする必要が生じる。……文の主句述語に向けての線条的な求心性には劣る構造〉であるなど、第二類の特異性が目立つが、この点は第五章の内容とも関わる。

ところで、これらの三類の準体句は、第一、第二、第三の順に文脈依存性が小さくなり、逆に句的性格は強まり、一は実質名詞を被語とする連体修飾に認められる装定関係表示性に近く、三は接続法の前句構成機能に近いと結論づける。準体句を含む名詞節の句的性格についての言及は他にもあろうが、接続法研究の第一人者ならではの分析であり、あるいは、この最後の結論が先ず最初に著者の脳裏に浮かんだのではないかとさえ思われる。

第五章は、第四章の共時的研究を承けての準体法の史的研究、特に衰退する準体法を補完する準体助詞「の」の形成に言及したもので、前半では、三類の準体句のうち第二類に属するものに時代的な推移が認められることを指摘する。衰退する準体句はいずれも代表語と統括語である述語とが意味的に対立し、〈統点〉が準体句末と、準体句を含む主文の文末とに分散するため、文全体の〈文末求心度〉は低いという構造的特徴を持つという。そして、〈そういう統点の分散が認められなくなるほど近代語の構文では統点の文末求心度が高くなる〉ため、準体句構成力が弱体化し、右にあげたような第二類の準体句は存在しにくくなったとする。準体句の構造とそれを取り巻く時代的な構文のあり様の両面から準体句の衰退に迫る分析といえる。ただ、代表語が句中に現れるのは第二類だけであり、他のタイプ、特に句的性格の強い第三類の準体句も依然としてかなり残存することをどう説明するかが問題として残ろう。

後半は、弱体化した準体句構成力を補完する準体助詞「の」の出自と定着の過程について言及する。準体助詞「の」の出自を連体助詞「の」の準体用法〔「わがの」などの「〜がの」〕と考えるとすれば、問題となる第二類の準体句を補強しようと思えばかなり早い時期に可能であったはずであり、従来から指摘されている「の」の出現が、なぜ室町末から近世初頭なのかという問題について充分説明が尽くされているとはいえない。「の」の定着過程が準体句の推移状況とほとんど無関係であることについては、準体法の弱体化は古代語にみられる三類の差を目立たなくする方向、すなわち〈全体として体言としての含意によって成り立つという単一の見方が容易になる方向〉に進んでいったからという興味ある解釈を提示しているが、もう一歩踏み込んだ説明がほしい。

なお、本書では、「のだ」「のに」「ので」などの「の」を準体助詞「の」出自としながらも、内実が異なるため準体助詞とは別扱いにするという。この点について『日本語接続法史論』を参照するよう原論文にはない補注を加えてはいるが、準体助詞「の」形成に直接関わる問題だけに、もう少し補注を充実させるなど、読者の便宜を図ってほしかった。

以上、準体法に関する章についてみてきた。準体句を三分類し、

そのうちの第二類に注目することによって、衰退の過程も含めてその全体像を示すことには成功しているといえよう。その意味でも第二類の扱いをどうするかは今後に残された重要な課題であり、あわせて、準体法の多用を許すような古代語の構文体制とはどのようなものであるかも考えてみる必要があろう。

三

次に、〈係り結び体制〉の崩壊と関連する六、七、八、九章をとりあげる。

第六章は、「にやあらん」を原形とする「やらん」という疑問の終助詞が、なぜ中世という時期に成立することになったのかを、構文史の大きな流れの中で探ろうとするもので、①中世に「にやあらん」に類する形式が目立つ理由、②「やらん」へ一体化した理由、③「に」を脱落させた力、④既存の疑問助詞との関係の四点について、係り結び体制の弱体化、構文の論理化という観点から解明したもので、具体的で読みやすい論考である。

第七章は、「ばこそ」「てこそ」「にこそ」などの非疑問形の反語形式と否定の「ばや」に言及したもの。係り結びの衰退により、従来反語表現を担っていた係り結びによる疑問形式が変質し、それによって古代語的反語表現も変質を余儀なくされ、しかし新しい疑問表現、それに基づく反語表現も成立していないという狭間の時期に成立したのが、「ばこそ」「てこそ」などの表現であったとする。あわせて、問題とされてきた否定の「ばや」がいわゆる願望の「ばや」と連続するのか否かについて触れ、当然「ばこそ」の影響のもと後世に成立したものと結論づける。前章とともに、疑問表現、条件表現に通じている著者ならではという問題のとらえ方に感心させられる論考である。ただ、「ばや」については実例を豊富に挙げる山内洋一郎氏の論[注2]（旧稿を補訂したもの）もあり、もう少し実例を挙げればさらに説得性が増すと思われた。

第八章は、係り結び体制に言及しながら、「やらん」「ござんなれ」、あるいは助詞「ばし」などは、係り結び体制の末期にあたる中世に出現した〈急激な変化を避け、旧い体制の効用も維持しながら〉〈主要な成分を一つにまとめて、文中の論理関係も重んじるという新旧連立的な形式〉で、新しい構文体制への移行が完了するとその必然性を失って消滅するものと捉える。特に係り結びとからめた「ばし」に関する分析は魅力的である。

第九章は、古代語によくみられる「～はあれど」「～しもあれ」「～だにあるを」などを、「あり」を含んだ句で対比的な意味を持つ前句の具体的実質的な意味を朧化することによって後句の事態程度を強調する構文であるとする。これらの構文が近代語で衰退する理由を一応「あり」自身の問題として捉えるが、ここでもこれらの構文に「は」「こそ」「しも」などの係助詞、「だに」「さへ」という副助詞が関与していることに注目し、衰退の理由を係り結び体制の崩壊と関連づける。

このように、六～九章の問題についていずれも〈係り結び体制〉の崩壊との関わりを指摘するが、その係り結び体制について直接

言及しているのが第八章で、本書の中枢の章と思われるので以下少し詳しく紹介する。古代語の係り結び（「は」「も」を除く狭義の意）は、〈上接の特定成分を卓示強調する強い情意の介入により、主述関係を初めとする文の主要な成分を二分することになる構文上の仕組み〉であると規定する。その上で、係り結びと関連する周辺の構文規則として、古代語における格助詞「の」「が」の主語表示が準体句、従属句、喚体性の句といった文脈に限られるという制限、あるいは、接続法において「は」「も」等の係助詞を起源とする「ば」「ども」などが盛んに用いられることをあげる。これらには係り結び体制が衰退するに及んで、「の」「が」の単文主格表示、あるいは、「を」「に」等の格助詞由来の接続助詞の多用というような変化がみられると指摘する。このように、著者の考える係り結び体制は係助詞、格助詞、接続助詞、喚体句等、すべてを視野に入れた構文史の大きな枠組みなのである。

では、係り結び体制の中核である係り結びの崩壊は具体的にどのような現象と捉えるのであろうか。係り結びは、〈その結びとなる連体形の、終止形に対する示差機能に支えられていた〉が、その〈崩壊の最もわかりやすい現れは……結びに乱れが生じだすこと〉であり、それは係助詞による文末への影響力の低下を意味し、係助詞は文末に移動し終助詞化するか、あるいは文中にあって副助詞化することによって文中の成分を二分化する力を失っていく。その背景には〈文の成分同士の論理関係を重視して、主要な成分を一つに取りまとめようとする時代の要求〉すなわち新しい構文体制への移行があるという。そして〈連体形の終止形同化現象〉も、係り結び体制の崩壊なしには進行し得なかったという。ならば、いかなる事情で係り結び体制は崩壊するのか、〈時代の要求〉以外に、言語内の理由は見いだせないのであろうか。著者自身、広義の係り結びを十分に分析する余裕がなく、係り結び体制の構造については不充分な点が多いと述べているが、「は」「も」のほか単文主格を表示する「助詞ナシ」の場合なども含め、詰めるべき問題も多いと見受けられる。

以上、従来軽く扱われたり見過ごされていたような問題を、係り結び体制の崩壊という大きな観点から構文史の流れの中に位置づけたことは、後学にとっては刺激的であり、論文集として一書にまとめられたことの意義も大きい。

四

誌面も残り少なくなったが、次に構文論とは関係が薄いとされる第十章「「しか」の源流」の一文を示す。

それらの語を形成させた時代の需要を探ることは、個々の語の形や意味についての源を探る以上に大事ではないかと思えるのである。

ここに、細部の変化を示すことよりも変化を引き起こす原動力を重視するという著者の立場が端的に示されているといえ、そういう研究のあり方を示すことにこの章の主眼があるようにも見受けられる。従来の史的研究に欠如することがしばしば指摘されてき

た姿勢であり、評価すべきものであるが、その反面、たとえば、「ほか」を「しか」の源流と考えながら、「ほか」から「しか」への音変化の道筋は、〈時代の要請する副助詞の枠〉があれば〈思わぬ転化も起こりうるはずである〉と軽く扱われる。これは極端な例であるが、このような点は本書全体の読後感として残るところでもある。著者には充分な用例の裏付けあっての発言ではあってもそれがあまり見えてこないため、本書で取り上げられた諸現象の多くが〈係り結び的構文体制〉に収束されるという総論には納得させられながらも、各論相当部分については、ある種の物足りなさを感じざるを得なかった。というよりは、特に著者独自の用語を用いた原理的考察部分などは、評者の力量の問題もあって(読み違へもこそすれ)、難解であった。

なお、資料に関していえば、古代語の係り結び的構文体制が隆盛を極める時期の資料の多くは仮名文からのものである。古代語における準体句の多用、第二章で指摘する古代語の修飾句構成の自由さなど、中古仮名文について小松英雄氏の提唱する〈連接構文〉という考え方[注3]に通ずるものがあるように評者には思われた。これに関連していえば、通史としての全体像を志向するという著者の論文の特徴であろう、本論中での先行研究に対する言及はあまり多くない。後学のためにも、先行研究との関係にもう少し言及してほしいと思う部分もあった。

本書は論文集という体裁ではあるが、以上見てきたとおり、前著をも含む形で各章が横断的に関連しており、その意味では『構文史論考』というタイトルに値する著書である。しかも、日本語構文史にとっての係り結び構文体制の広がりの大きさを改めて認識させ、構文史研究に一石を投じたという点で、本書刊行の意義は大きい。今後、この旧くて新しい〈係り結び体制〉の研究がさらに進展することを期待して、書評の責を終えることにする。

注1　近藤　泰弘　「中古語の準体構造について」(『国語と国文学』五八巻五号　昭和56〈『日本語記述文法の理論』所収　平成12〉)

注2　山内洋一郎　「否定の助詞「ばや」について」(『中世語論考』所収　平成2)

注3　小松　英雄　『仮名文の原理』(昭和63　『仮名文の構文原理』として平成9改題再版)

(二〇〇〇年九月三〇日発行　和泉書院刊　A5判　二四七ページ　本体価格八〇〇〇円)

――神戸女子大学教授――

(二〇〇一年八月三日　受理)